

Title	どのようにして十字架と復活のもとで永遠のいのちは実現されるのか(朴成奎先生「生命の危機的時代にいのちの尊厳を確立するための神学的対案の模索」に対するコメント)
Author(s)	姜, 尚中
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.59, 2015.3 : 51-54
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=5489
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

朴成奎先生「生命の危機的時代に

いのちの尊厳を確立するための神学的対案の模索」に対するコメント

どのようにして十字架と復活のもとで永遠のいのちは実現されるのか

姜 尚 中

朴成奎先生の講演原稿は、第四回日韓神学者会議のメインテーマの本質に迫る含蓄に富んだペーパーです。

韓国と日本で、期せずして多数の人命喪失をもたらす出来事が起き、それらは各々の社会が抱える深い病理を抉り出すことになりました。朴先生の言葉借りれば、どちらの社会も「肉体的にも精神的にも言葉ではとうてい尽くし難い苦しみを受け、憂鬱状態に陥り、いのちの尊厳に関する問題に悩むようになったのです。日本の著名な文豪は、ある小説のしめくりに「悲劇は喜劇よりも偉大である」と述べていますが、悲劇の最たるものは死です。生きとし生けるもの、死は避けられないにしても、日本も韓国も、まるで死を忘れた世界に生きているような錯覚に陥っている時に、忽然として夥しい数の死に直面し、死を忘れた贅沢に戦っているのです。まさしく「死を忘れるものは贅沢になる」のですが、その贅沢が根底から崩れるような不安が国民を捉えたからこそ、日本でも韓国でも、憂鬱な状態が国民を襲ったのです。

その憂鬱な状態から垣間見えたことは、死を忘れた贅沢が、実は生そのものをも無意味なものにしていたという背理

でした。日本も韓国も、ある意味で、いのちを粗末に扱い、人命を、さらに人権を軽んじ、ひたすら生を蹂躪する「先進国」になっていたのです。それは倒錯としか言いようがありません。死を忘れ、ひたすら生のみに固執し、その豊かさを競いあつてきた社会が、実は生の無意味化をせっせと押し進めていたのですから、それは倒錯した病理としか言いようがないのです。そこではいのちの尊厳は輝きを失っていました。

朴先生は、そうしたいのちの尊厳を脅かす要因として、いくつかの病理を挙げていますが、その指摘は正鵠を得ていると思います。ただ、ここでは朴先生が指摘されていない、きわめて重要な病理を取り上げておきたいと思います。それは、グローバルに拡大しつつある、「市場原理主義」の問題です。

自己調整的な市場のメカニズムによって最大の効率性が達成されるという市場原理主義は、土地（自然）と労働（人間）そして貨幣の商品化を極限にまで押し進め、自由と欲望の無制約的な拡大を謳歌するようになりました。創世記以来、産み、増やし、地に満ちることが、神が創造したいのちの祝福であったにもかかわらず、実際にはいのちの価値は、グローバルな市場という「匿名の神」に仕える手段の系列（すべてのものの商品化）に墮してしまったのです。手段（商品）の系列と連鎖が、実際には人間と人間の関係、さらに人間と神の関係が疎外され、モノ化したものであるにもかかわらず、私たちは、その倒錯した網の目の中で利己的な、ひとときの生を豊かにすることに血道を上げてきました。そして時おり、そのような利己心のやましさを一時的に慰撫するために、教会の門をくぐり神の前にぬかずき、祈りを捧げているとも言えます。この意味で、私たちの多くが意識的、無意識的に「偽善者」(hypocrite)であると言っても言い過ぎではありません。

市場原理主義のグローバル化の中では生は、さらにいのちは、市場的価値、貨幣によって測られるモノに過ぎません。この意味で、私たちは日常的にいのちが疎外される事態を受け入れ、さらにはそれをあたかも優れたものであるかのごとく誇っているのです。それは、マモン (mannon) の神に仕える優秀さをグローバルな価値とみなしているこ

とを見れば明らかです。実に「汝ら神と富「マンモン」とに兼ね事^{つか}ふること能^{あた}わず」（「マタイ傳福音書」第六章二四節）を否定することが、グローバルな価値とみなされているのです。

こうしたいのちの尊嚴の否定に対してさらに別のいのちの尊嚴の否定が日韓、それぞれの国に広がっています。それはグローバルとは反対に、私たちを国家や国民共同体の内側に引き籠らせ、そのアイデンティティをあたかも絶対的に変えられない宿命であるかのように鑄型に嵌め込もうとする力です。その力をナショナリズムと呼んだらいいのかどうかは別にして、国民をまるで「国家教」に「改宗」させるような排他的な力が、国民の中に「内なる国境」線を引きつつあるように見えます。いのちは神の創造の賜物であり、私たちひとりひとりのいのちに聖靈が宿り、私たちが、人種や民族、国籍や所属の違いを超えた「神の家族」の一員であるにもかかわらず、私たちのいのちは、国家という擬似的な共同体の中に閉じ込められ、幽閉されているのです。私たちは、今もって「国家の囚人」である状態から脱却できていないのです。

私は、さらにいのちの尊嚴に対する脅威として、人間の命をもモノの因果律に置き換えていくような「自然主義」的な科学やテクノロジー支配を挙げておきたいと思っています。いのちの誕生とその死滅すらも工学的な操作主義の対象にする「自然主義」的な見方が、他方で宗教を、神を単なる迷妄と断じ、新しい無神論を勢いづかせているように見えます。ただはつきりと言えることは、独り子を自ら犠牲に差し出された神の愛は、「自然主義」的な科学からは導き出せないということです。この余りにも明白な真理にもかかわらず、日韓それぞれの国には他の国にも増して科学主義への過信が今もつよく根を下ろしています。それが、先の市場原理主義とリンクし、いのちのモノ化、商品化を押し進めているように見えてなりません。

最後に触れたいのは、日韓それぞれの国で進みつつある社会の原子化です。この点については朴先生も一部触れられています。私がとくに言及しておきたいのは、情報ネットワークで過剰なほどに人と人とが繋がっているように見

えながら、繋がっていけばいるほど、逆にバラバラの原子化が深まり、社会の紐帯が綻びつつあることです。このことは、若年層の自死の比率が OECD の中でとくに高い韓国を見れば明らかです。いのちの尊厳は、情報ネットワークによる「全般的な繋がりが」の拡大にもかかわらず、益々軽んじられつつあるように見えてなりません。そこから垣間見えるのは、ひとりひとりの無力感と虚無的な諦念ではないでしょうか。

これまで、朴先生の問題提起に応じて、私なりに四つの、いのちの尊厳に対する脅威について言及してきました。その神学的な解釈については、いのちの理解は、「キリスト論を中心とする方向へと展開される」べきだとする朴先生の考えに賛成です。また死をも含めたいのちの理解は、イエス・キリストの十字架と復活に基づいていなければならないという朴先生の神学的対案にも賛同の意を表したいと思います。

ただ、その神学的な対案が、ここに挙げたいのちの尊厳を蹂躪する脅威へのひとりの信仰者としての応答としてどのように実現されるのか、その道筋を伺いたいと思います。